

【小説部門・最優秀賞】

沙瑛、大好き

滋賀県立石山高等学校 2年 諏訪若奈

「沙瑛、大好き」

その声はいつもよりずっと強く、心に響き渡った。かすかに波の音も感じた。私は海に誘われたような気がして、胸元のネックレスを握り、荷出しの途中で家を抜け出した。

さざなみが心を覆うような優しい音を立てて、引いていく。あの声はもう聞こえない。

私は波打ち際にしゃがんだ。海を見るのはいつぶりだろうか。波の音がセミの鳴き声とは対照的に、涼しげな音を奏でている。

「沙瑛、大好き」シーグラスを握れば、遠い記憶の声が蘇る。どこのだれか、いつ言われたのかも分からないその声は、透明のガラス玉を射す光のように美しい。私の味方と語っているようで、シーグラスを握ると不安が和らぐ。

シーグラスは海を渡って砂浜に漂着したガラスのかけらのこと。水の流れて揉まれて角が取れて丸くなっている。表面はざらついていて不透明だが、水に浸らせると、宝石のように透き通ってきれいだ。私が持っているシーグラスは海に溶け込む青色で、金具をつけてネックレスにして、いつも身に着けている。

「沙瑛一、なにしてんだ。そこにいてないで手伝え」

お父さんの声が出て私は振り向いた。新たに住む平屋のそばで、荷出し最中のお父さんが塀から顔を出していた。今回で四度目の引っ越しだ。海のそばの引っ越しは二回目。私は浅く息を吐いた。夏休みが終わると、学校が始まる。私はみんなの前に立って、自己紹介をする。未来への不安が高まり、シーグラスを握る手が一層強くなった。喋らない私は、また変な目で見られるんだろうな。

家の中では話せるが、学校や外では喉が詰まったようになって、声が出せなくなる。話をしたいのに、声にならないのは、話すことをどこかで恐れているからだそうだ。不思議な目で見られ、呆れられ、やがては見放される。わかりきった未来が恐ろしい。

その時、シーグラスが光った。朝の空のように淡い青色の光を発している。初めてのことに、私は息を止めてシーグラスを見入っていた。

すると波が不可解な動きをしているのが見えた。ジェットスキーのように白い水しぶきを上げながら、凄まじい勢いでこちらに迫ってくる。逃げようと思って立ち上がった時には、水しぶきは収まり、手の形をした水のかたまりが私の前に現れた。大きな人間の形をした手。海水でできた瑠璃色の手が海から生えていて、私に手のひらを向けている。海の手は、母親が子どもに手を差し伸ばすような優しさの中に、どこか異質で威圧的な雰囲気漂わせていた。おかしいと思っても、この身体は微動だにしない。まるで他人事のように私はこの光景を眺めていた。叫びもせず、逃げもせずに、ただ突っ立っていた。そんな私の前に、海の

手は、ゆっくり手を振って誘う。

「沙瑛、おいで」

心の中に重く、ずんと響く声で私を呼んでいる。筋肉のこわばりがほぐれていく。自分の意志なのかわからない。身体が動いて、海の手近づいていく。まるでそこに救いがあるかのように。私の右手を海の手の人差し指に乗せる。海の手が水平線に向かってゆっくり進みだした。私も水に足を取られながら、一緒に歩いていく。腰ぐらゐまで水がつかると、海の手は私の身体を抱きながら、一気に降下した。全身が海の中に入っていく。水音が全くしないほどの異様な速さだった。口や鼻に水が入って息ができない。苦しい。

海の手から身体を放そうともがくが、海の手は放してくれず、そのまま暗い海底に進んでいく。私をどうするというのか。やっと事の重大さに気づいた私はもう小魚のように小さな泡を吐き出すことしかできなかった。

「起きて！」

甲高い声が聞こえた。少し目を開けると、青空が目飛び込んできた。

「よかった～！ 起きた」

視界の左端に、長い髪を垂らした女の子の顔が映った。女の子の隣に隠れるようにして小さな五歳くらいの女の子もしゃがんでいる。

私は安堵し、息を吐いた。元の場所に戻ったのか。海の手はただの夢で、ここで寝てしまっていたのだろうか。きっとお父さんたちが引っ越しの作業をしているはずだ。私もそろそろ手伝いに行かないと怒られる。ゆっくり身体を起こした。

「起きて大丈夫？」

女の子が心配そうに私を見た。あたりを見回し、すぐに異変を感じた。私が住むはずの家がない。浜辺の先には、私よりはるかに高い堤防がたっている。そんなはずがない。私のいた場所は砂浜の向こうに同じ背丈くらいの塀があって、そこからお父さんが顔を出していた。元居た場所に戻れたんじゃないのか。

「なにがあったん？」

違う。これは夢じゃない。服をぎゅっと握った。服の表面は濡きかけているが、まだかすかに濡れている。シーグラスが光って、海の手が出てきて、海の底へ沈んでいったのは本当にあったことなのか。

「君、ここらで見いひん顔やけど、観光客？ ここ海水浴場ちゃうよ」

私は首を横に振る。長い髪の女の子が私の前にしゃがんだ。

「それ、シーグラス？ もしかしてシーグラス取りに来たん？」

私はうなずいた。

「きれいやねー、そのネックレス。君が作ったん？ なあ沙瑛。怖がらんでええよ。こっち、きい」

女の子が後ろにいる小さな子を手招きした。

沙瑛？ どうして私の名前を初めて会ったこの子が知ってるんだ。小さな子が私に近づいて、指を口にくわえながらシーグラスを眺めている。あまり身から離したくなかったが、小さな女の子が興味津々な顔をしていたので、私はシーグラスのネックレスを首から外し、手の上において見せた。

「ところで、君。名前なに？」

名前を聞かれ、咄嗟にうつむく。転校した時のことを思い出す。休み時間、私の机の周りにみんなが集まってきて、好奇の視線で、矢継ぎ早に質問されたあの日。私はただ目を伏せ、じっとしていた。全部、言いたいことを心で言ってきた。やがてみんなは私を、お話ししないおかしな子と見なし、机の周りから、引いていった。好奇の目が奇怪なものを見る目に変わっていく瞬間がたまらなく嫌だった。また、それが繰り返される。そう思うと顔を上げられなかった。

「どうしたん？　なんか言うてえや」

話せないことに気づかれ、冷や汗が出る。小さな女の子が長い髪の女の子に体をピタッとくっつけていた。

「沙瑛、そんな触ったらいかんよ」

まただ、沙瑛って私の名前を呼んだ。どうして私の名前を知っているんだ。いいや、私に言っているんじゃない。この女の子は、小さな女の子に向かって言っている。この子、私なのか。そうだ、私、この人たちの声、知っている。閉ざされた記憶の奥から、一つの記憶が呼び覚まされた。

髪を一つに結わえてとろんとした雰囲気を持つ恵那ちゃん。そして、恵那ちゃんの手を力いっぱい握って、不安げに私を見つめるのが過去の私、沙瑛だ。

恵那ちゃんは島に住む、唯一のお友達だった。小さいころから恥ずかしがり屋でありあまりしゃべらなかつた私が唯一、信頼のおける人だった。どうして私は、過去の沙瑛のもとへたどり着いたんだ。私はどうなるのだろう。

「どうしよう……誰か大人の人に。あ、沙瑛んち行く？　ここから一番近いところは沙瑛んちやし。そこなら書くもんある。おじさんたちもいるしね」

私は息をのんだ。沙瑛の家、私が昔住んでいた家だ。そこには私のお母さんとお父さんがいる。

事情を聴いたお父さんは、すぐに私たちを家に入れてくれた。ひんやりした空気が乾ききっていない服にしみついて、冷たい。私たちは机に案内され、椅子に腰掛けた。私のお母さんもやってきて、冷たい麦茶を出してくれた。

「沙瑛、鉛筆と紙を持ってきてくれ」

過去の沙瑛は私の前に一枚の紙と鉛筆を置いてくれる。

「それで、君、名前はなにかな」

私の真正面に座ったお父さんは穏やかな声で私に尋ねる。私の名前をこの紙に書いてい

いのだろうか。私が沙瑛と名乗れば、私が未来から来たということがばれてしまうかもしれない。いっそのこと、ばれてしまった方がいいのだろうか。未来の沙瑛は今にも折れそうで、家にも居場所がなく、外では一言も喋られない。そんなことを過去の沙瑛が知ったらどうなる。これは隠し通さなければいけないことなんじゃないか。そう考えると、どうしても鉛筆を握れなかった。

「君はどうして話せないのかな」

核心を突かれた質問をされ、息をのんだ。

家の中でも、外の世界でも一人ぼっちの私は、昔の沙瑛が心底うらやましかった。昔の沙瑛はお父さんやお母さんから、ちょっと恥ずかしがり屋な子として見られているだけ。誰からも見捨てられ、深い海の底でいつまでも、もがき溺れている私と大違いだ。医者に精神的な病気と診断されたとき、お父さんたちは、私を罵倒した。クラスメイトのように、さんざんな言われようだった。

お父さん、お母さん。せめて、家族だけでも、私を見て。私に息をさせて。お父さんとお母さんは私を沙瑛だと知らない。それなら。汗で濡れた手で鉛筆を握って、自分の思いをつづる。

『沙瑛が話せなくても責めないで』

私が書き終えた瞬間、手の力が抜け、鉛筆がカラカラと無機質な音を立てて倒れた。部屋に沈黙が落ち、やってしまったと痛感した。

すると恵那ちゃんが張り上げた声で言った。

「……ねえ、見てあれ。あの光なに」

窓の外には空に一直線の青い光があった。心臓が激しく波打った。あれは、シーグラスの光だ。でも、私の胸元にあるはずのシーグラスがどうして海の方から光っているんだ？

目をそらして、胸におそろおそろ手を当てた。ない。やっぱりない。一瞬にして、頭から足先まで血の気が引くのを感じた。

なによりも大切なものを、私は落としてしまったのか。さっき砂浜で見た時はあった。過去の沙瑛にシーグラスを見せた時、私は首からネックレスを外した。きっとその時だ。探しに行かなければ。あのシーグラスがあって、「沙瑛、大好き」というあの声が私を支えてくれたから、私は今まで頑張れた。あれがなかったら、私はもう前を向けない。私は席を立ち、玄関へ急いだ。

「ちょっと、どこ行くん？ 顔、真っ青やで」

恵那ちゃんが走って追いかけてきた。

「……もしかして、あのシーグラス、なくしたん？」

手で押さえていた胸元にシーグラスのネックレスがないことに気づいたのか、恵那ちゃんは訊いた。

すると過去の沙瑛が、か細い声でつぶやいた。

「沙瑛、あのネックレスもっかい見たい。めっちゃきれいやった」

反射的に過去の沙瑛を見た。そうか、昔の沙瑛は家の中では気楽に話せるのか。

「そやな。いこか」

私たちは玄関に急いだ。

「なあ、君」

お父さんとお母さんが私の後をついてくる。私はドアを開けようとして止まった。

「君はどうして沙瑛の名前と、漢字まで知っていたんだ？」

全身の産毛さえもが逆立ったように、身体に緊張が走った。張り詰めた空気が続く。

「……そうなのか？」

お父さんがかすれた声でつぶやいた。今の私をあまり見てほしくなくて、私は振り返らずに小さくうなずいた。ドアノブを握る。

「どうして」

お母さんが言った後に、お父さんは息を大きく吐いて、落ち着いた声で言った。

「話せないんだな、今でも」

事実だけど、認めたくなくて、後ろにある沙瑛の小さな靴をただ必死に眺める。

「なぜあんなことを書いたの？」

お母さんは戸惑ったような声で聞く。私はわかってほしかった。私の気持ちも知らずに引っ越しを繰り返してきた。唯一話せる家の中でも、私は空気のようにあしらわれた。私が話せないことに呆れて、何度もため息をつかれた。

「責めているのか……君を、未来の僕らは」

一呼吸おいてお父さんは言った。

「……すまない」

ドアノブに当てた手を強く握る。扉を開こうとしたとき、父は早口に言った。

「沙瑛、自分を信じて生きるんだ。君の味方は君自身だ。そして君だけじゃない」

「私たちもよ」

お父さんとお母さんは私に、そう告げた。

そんなわけない。私は一言、心の中で吐き捨てて、ドアを開けた。

海が荒々しく、暴れている。

「なんで高波が……。やばいで……。逃げな、飲み込まれる！」

海の手だ。海の手がやったとしか思えなかった。堤防の内側の道路でさえも水しぶきが降りかかるほど波が猛っている。今、海に近づいたら危ない。でも目の前に天まで続く一筋の光がある。シーグラスの光が目の前で輝いているのだ。行かないといけない。私は堤防の途切れている部分から海に近づいた。

「やばいでこれ。逃げな早く！」

恵那ちゃんに腕をつかまれた。けれどそんなことどうでもいい。私は荒れ狂う海に必死に近づく。

「なあ……沙瑛は？」

恵那ちゃんが震えた声で言った。そばに過去の沙瑛がいなかった。波の音が消え、心臓の音が破裂しそうなほど強く聞こえた。

私は海の中に足をつっこんで、沙瑛を探した。シーグラスの光が揺れている。あそこに沙瑛がいるのではないか。波に足を取られそうになりながらも私は光を目指した。波から人間の頭が見えた。沙瑛だ。溺れて、水をかきあげている。光は沙瑛の手からだ。よかった、過去の沙瑛がシーグラスをつかんでいる。

大丈夫、今助ける。そう思ったのに、足が動かない。過去の沙瑛が死んだら、今の私はいなくなるんじゃないかと、ふと思った。苦しかったことも辛かったことも全部泡になって消えていく。私を認めてくれる人たちはいたのだろうか。私に光はあるのか。私に信じられるものはあるのだろうか。なんでも諦めてきた、私はなにをしたい？ お父さん、自分を信じるってなに？ どういうこと？

また、諦めてしまっているのか。生きることを諦めていいのか。

『自分を信じて』……そうだ。私は、本当は、自分を信じたかった。普通のこともできない私は、なにかかもが嫌いで、劣等感しか抱けなかった。誰も私を味方してくれない。いつも置いてきぼりで、暗い海の底で溺れているようだった。でも、私と一番近くで、ずっと私を見てきた人がいるじゃないか。自分を信じるということは、私を受け入れること。私は、私でいい。私の味方は私自身だ。

潮が引くように心から重荷が消えていく。

沙瑛、私の過去の沙瑛。あなたはこの先、いっぱい辛いことがあると思う。話したくて、自分の意見を言いたくてもずっと我慢して、悲しい思いをするだろう。

必死で水をかきあげ、過去の沙瑛の手を握ろうとする。

それでも、なにがあっても、自分が自分を一番守れて、精一杯愛せることを忘れないで。

過去の沙瑛の、小さな身体を抱きしめた。沙瑛の小さな手にはシーグラスが握られている。届け、私の気持ち。過去の自分に一番伝えたいことを！

「沙瑛、大好き」

水に濡れて透き通り、きらきら光るシーグラスのネックレスを、過去の沙瑛の首にかける。話せないで、呆れられて、不器用で、嫌なことばかり。こんな醜い私を愛せと言われても、私はこれから先も愛せないかもしれない。今までだって、私は私のことが嫌いだった。

私は沙瑛を抱っこして、海と離れた砂浜の上に寝かせた。恵那ちゃんが駆け寄る。海の手は出会った時と同じように私に向かって、手を振っている。私は海の中を不格好ながらも、かき分けながら進んだ。何度も波に足を取られそうになった。それでも、襲い掛かる荒波に屈せず進んだ。そして海の手を握る。海の手は私を優しく包んで、海の中へ潜った。

ああ、これでよかったのかな。また辛い現実を見ることになる。苦しい、辛い、そんなこ

とが何度も繰り返されるだろう。でも私、やっとわかった。話せない自分はだめじゃない。私は私。今の自分を好きになりながら、もっと好きになれるように頑張ろう。

「沙瑛、未来を信じて」

誰の、なんだこの声……これは。ああ、そうか、そうなのか。君も私か。海の手が私の体をきゅっと包み込んだ。海はとても不思議だな。私は、笑えた気がする。

同じことの繰り返しかもしれない。チャンスをまた逃してしまうかもしれない。一生つかみきれずに死んでいくかもしれない。未来は不確かなことばかりだ。それでも私は、私が、心の底から楽しいと思える未来を創る。

目が覚めた。私のもとにはもう、シーグラスのネックレスはなかった。心に手を当てながら立つ。

「沙瑛」

背後からお父さんとお母さんの声がした。後ろにいるとは思わなくて、全身に力が入って、身体が硬直する。

「思い出したんだ。沙瑛がまだ五歳だったころ、未来の沙瑛が現れた日を。僕たちはずっと沙瑛を責めていた」

「沙瑛」

お父さんはもう一度、私を呼ぶ。

「沙瑛、大好き」

お父さんとお母さんは、今までしてこなかった、ハグのすべてを凝縮したかのように、私を強く、強く、抱きしめた。鼻や喉がチクチクする。あふれる感情を抑えようと、唇をかみしめる。けれど、抑えられなかった。涙がほろほろあふれ出す。私はずっと一人ぼっちじゃなかったんだ。私は生きてていい。私には寄り添ってくれる人がいる。家族は私を愛してくれている。

日が沈みかけて、海に夕焼けが映るとき、私はまた一人で海を見に行った。海の先の、あたたかいオレンジ色の光を見つめる。

自分を信じて。未来を信じて。

海を前にして、右手を上げる。

私は、広大で、美しい、きらめく海をぎゅっと握った。